2021 年 7 月 29 日の「霊性の回復セミナー」

初代教会における福音の理解の再考

【新改訳 2017】Ⅱテモテへの手紙 4 章 2～4 節

2 **みことば**を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。
　忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。
3 というのは、人々が**健全な教え**に耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、
　自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、
4 **真理**から耳を背け、作り話にそれて行くような時代になるからです。

●各節にある「**みことば**」「**健全な教え**」「**真理**」は同義です。パウロはヘブル特有の修辞法によって、「福音」を言い変えているのです。パウロは愛弟子であるテモテに対して、「あなたは務めにふさわしいと認められる人として、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神に献げるように最善を尽くしなさい。」(Ⅱテモテ 2:15)と言っています。ハウロ自身にとって「みことば」は「福音」そのものであり、彼を通してそれが余すところなく宣べ伝えられたのです。

●ところで、新約聖書で語られている初代教会の「福音」とは何だったのでしょうか。今回の「霊性の回復セミナー」ではそのことを、原点に帰って再考するようにと導かれています。

1. 百二十歳の奥義

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 5 章 39～40 節

39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。
　その聖書は、わたしについて証ししているものです。
40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

●これは驚くべきイェシュアのことばです。「あなたがた」とはユダヤ人のことです。彼らには聖書が与えられていました。ここでの「聖書」とは、私たちがいうところの旧約聖書のことです(ユダヤ人にとっては「タナフ」)。彼らは聖書を自分たちの土台として、それを読み、かついのちを得ようとしていました。ところが、その聖書は「**わたしについて証ししているもの**」だとイェシュアは言われたのです。つまり聖書とはイェシュアご自身について書かれているものだということです。これはとても重要なことです。しかし、聖書を読みながら、「あなたがたはわたしのもとに来ようとはしない」と言われたです。ユダヤ人は今日でもそうです。しかし、クリスチャンであっても、もし的はずれな読み方をしているならば、みことばを悟ることはできませんし、神の豊かないのちにあずかることはできないのです。

●イェシュアはさらに、こうも言われました。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 5 章 46～47 節

46 もしも、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。
モーセが書いたのはわたしのことなのですから。

47 しかし、モーセが書いたものをあなたがたが信じていないのなら、
どうしてわたしのことばを信じるでしょうか。

●ここでは「聖書」が「モーセ」に変っただけです。ユダヤ人にとってモーセは偉大な人物です。旧約聖書のモーセ五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)は、旧約聖書の中で最も中核的な部分です。それを書き記したのかモーセです。ところが、イェシュアは「モーセが書いたのはわたしのことであり、あなたがたがモーセを信じているいるなら、わたしを信じたはずです」とも言われました。つまり、このことばは「モーセは、わたしを啓示する型となる存在である」という意味です。このことを踏まえた上で、今回、ある一つの話をしたいと思います。それは「**百二十歳の奥義**」です。

●創世記 6 章には、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつもわるいことだけに傾くのをご覧になったので、神は心を痛められて、洪水によってリセットしようとされたということが記されています。このリセットが「ノアの洪水」と言われるものです。しかし神はその前に不思議なことばを語ります。それは、「わたしの霊は、人のうちに永久にとどまることはない。人は肉にすぎないからだ。だから、**人の齢は百二十年にしよう**。」ということばです。なぜ神は唐突にこのようなことばを語られたのでしょうか。

●「**人の齢は百二十年にしよう**」というとは、単なる「百二十歳」という意味ではなく、実は奥義なのです。つまり、隠された神のご計画を示すことばなのです。これを肉で(人間の常識)で理解しようとすると、何の意味もありません。ノア以前の人々の齢は九百年代でした。ノア自身は九百五十年でした。それから次第に人の年齢は少なくなり、ユダヤ人の父祖であるアブラハムの父テラは二百五年で死んでいます。アブラハムは百七十五歳、その息子イサクは百八十歳で長寿を全うしています。さらにヤコブは百四十七歳、ヨセフは百十歳で死んでいます。神が言われた百二十歳で死んだのは、モーセただ一人だけなのです。

●「百二十歳」という奥義を理解するために、先ほどのイェシュアが言ったことば、つまり「もしも、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことなのですから。」を思い出してください。

①　【新改訳 2017】申命記 31 章 2 節

・・・・「**私(=モーセ)は今日、百二十歳だ。もう出入りすることができない。**【主】は私に『あなたはこのヨルダン川を渡ることはできない』と言われた。

※「もう出入りすることができない」とは「もはや自分の務めを果たすことはできない」という意味です。

②　【新改訳 2017】申命記 34 章 5～7 節

5 こうしてその場所で、【主】のしもべモーセは【主】の命によりモアブの地で**死んだ**。

6 **主は彼を**、ベテ・ペオルの向かいにあるモアブの地の谷に**葬られた**が、今日に至るまで、**その墓を知る者はいない。**
7 **モーセが死んだときは百二十歳であったが、彼の目はかすまず、気力も衰えていなかった。**

●モーセの死に際しては、主が自ら彼を葬っており、彼の墓を知る者はだれもいないのです。そして、死んだにもかかわらず、「彼の目はかすまず、気力も衰えていなかった」と記しているのです。これは普通あり得ないことです。ここに奥義が隠されているのです。つまり、モーセの百二十歳の死において、**イェシュアの死と復活が預言されている**ということなのです。

●「**人の齢を百二十歳にしよう**」という神のことばは、**御子イェシュアの死と復活によって、人を新しく造り変えようという神のご計画が啓示されていた**のです。その型がノアの洪水と箱舟の話です。その箱舟に入った八人が水を通って救われました。これはバプテスマの型です。「この水はまた、今あなたがたにイエス・キリストの復活を通して救うバプテスマの型なのです」とペテロは語っています(Ⅰペテロ 3:21)。

●ノアはイェシュアを表しています。なぜなら、ノアの名は「慰め」を意味する「ノーアッハ」(נֹחַ)です。その語源は「ナーハム」()で「慰める」(強意形)という意味だけてなく、「神が悲しむ、あわれむ、思い直す」という意味を持っています。それはいわば「神の救い」を意味しています。そして彼だけが、「**主のみこころにかなっていた**」(創 6:8)のであり、「彼の世代の中にあって全き人」であり、「神とともに歩んだ」人であったのです。これはまさにイェシュアの型です。さらに、ノアとともに箱舟に入った三人の息子たちからもろもろの国民が地上に分かれ出ますが、彼らはノアのうちにあって包括的に救われたと言えるのです。人だけでなく、すべての生き物(被造物)もそうです。ノアの箱舟は、**イェシュアによって人と被造物が包括的に救われるという型を示す出来事**だったのです。

●神のご計画とみこころは「イェシュアの贖いの事実」を通して、人をイェシュアのうちに取り込んで(包括して)、人を新しく造り変えることです。「死と復活」によって人を新しく造り変えるという神のご計画を知るためには、キリストの贖いの事実を正しく理解する必要があるのです。つまり、初代教会の福音の理解に戻らなければなりません。

●上記のように、初代教会の「贖いの理解」は「死と復活」にとどまってはいませんでした。「最後のアダム」であるイェシュアは、「最初のアダム」にあったすべてのものをご自身のうちに包括的に集めて死へと渡され、取り除かれました。そしてさらに「最後のアダム」であるイェシュアは「第二の人」として復活され、すべてを包括的に永遠に回復されました。この一連の事実を、私たちが信仰によって個別的に受け入れることで、贖いのわざは究極的に完成するのです。このような視点と理解を持つことは、神のご計画の全貌を知って今を生きることを意味するのです。

2. イェシュアの贖いの出来事

(1) キリストの贖いの内容

●神の「人の齢を百二十歳にしよう」という不思議なことばは、「地上に人の悪が増大し、その心に図ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった」神が、人を救うために「死と復活」と言う出来事によって人を救い、神が人とうちに住まわれるという計画を啓示することぱ(奥義)であることを述べてました。神はそのご計画をイスラエルの民の歴史を通して、繰り返して語って来られたのです。そして、その神の計画は「イェシュア」と「インマヌエル」という二つの名前に集約されています。一つは「救う」という意味の「ヤーシャ」(יָשַׁע)に由来する「イェシュア」(יֵשׁוּעָה)の名の中に、もう一つは「神が救った者たちとともに住む」ことを意味する「インマヌエル」(עִמָּנוּאֵל)の名の中に啓示されています。以下は、出エジプト記それ自体が啓示していることです。**救いの目的は神が民の中に住まわれるため**です。

25～40 章	1～23 章
内住	**救い**

●この救いを、イェシュアによる一連の贖いの出来事(1～11)としてみて行きたいと思います。その一連の出来事こそキリストの贖いの出来事(=救い)なのです。この出来事を知ることは、贖いの偉大を知ることができ、生ける希望をもってこの世を生きることができるのです。

(1) イェシュアの受肉
(2) 33 年間の罪なき生涯
(3) 受難
(4) 死
(5) 埋葬
(6) 陰府へ下る

(7) 復活
(8) 顕現
(9) 昇天
(10) 着座
(11) いのちを与える御霊

●私たちの救いのために、イェシュアはこれらの一連の出来事を通ってくださったのです。一つ欠けても贖いは成立しません。すべてが必要なのです。そしてこのキリストによる贖いこそ、教会が宣べ伝えるべき「**福音**」なのです。これらの一連で出来事が健全な教えとして語られているなら、福音の理解は健全です。しかし、キリスト教会がこの贖い(福音)をそのままに語ることなく、「死と復活」で括ってしまっているとすれば、福音の意味は不十分となります。キリストの贖いのこれら一連の出来事を省略することなく、いつでも、どこでも、誰に対しても語り続け、教え続けなくではなりません。初代教会が伝えた福音を正しく理解することで、教会はいのちを回復し、宣教の働きは力づけられるのです。

●受肉からはじまって受難と死、さらに復活・昇天・着座によって、イェシュアに栄光が与えられました。そして「最後のアダム(=イェシュア)はいのちを与える御霊となった」(Ⅰコリ 15:45)と使徒パウロは記しています。この最後の部分がとても重要なのですが、そのことを正しく語っている教会は少ないようです。アンドリュー・マーレーが「キリストの御霊」の中でそれについてわずかに触れてはいます。しかも、Ⅰコリント 15 章 45 節のことばを、贖いの究極であると的確に述べているのです。このことは後に再度触れたいと思います。

(2) 信条の弊害

●伝統的なキリスト教会では、異端の教えから教会を守るため、また教育目的で作られた数々の信条があります。なかでも、「使徒信条」はキリスト教会の基本的な信仰告白とされています。この信条は二世紀後半に作られ、教会の基本的な信仰告白をまとめたものとして、今日においても、カトリック教会やプロテスタント教会では毎週の礼拝の中で唱和しているようです。私が育った教会では、使徒信条が礼拝ごとに繰り返されていました。ところが、日本にある神の教会ではこれを毎週の礼拝ごとに唱える教会と、問えていない教会があることを神学校時代に知りました。宣教師が開拓した教会ではこれを用いることはなかったようです。なぜなら、神の教会改革運動では、人間が作った信条を一切否定したからです。と言っても、私自身は使徒信条を告白することになんら問題を感じたことがありませんでした。ところが、今年になって、神の教会改革運動の霊的に力をひしひしと感じるようになったのです。そのきっかけは、キリストの贖いの最後である「最後のアダムはいのちを与える御霊となった」ということに目が開かれたからです。私たちがいつも習慣的にしていることが、知らず知らずのうちに理解の型紙が造られているために、何ら疑問を感じないのです。私がそうでした。もし福音の重要な部分が欠落したままの状態でいるとすれば、初代教会のように福音が人を動かすことが浅薄なものとなってしまうことを感じたのです。もう一度聖書に戻って、初代教会が理解した福音を再確認することは、私たちの信仰をメンテナンスすることになります。そして、このことは大切なことだと考えます。

●使徒信条にあるキリストの贖いの内容は、確かに、受肉があり、受難があり、死があり、陰府に降りの部分があります。そして、さらに復活があり、昇天と着座があります。それ自体間違いではありませんが、不十分なのです。使徒パウロが「最後のアダムいちの与える御霊となられた」ことで、キリストの贖いの全貌が見えてくるからです。その贖いの全貌をここで　見てみたいと思います。

最後のアダム(Ⅰコリ 15:45)	第二の人(Ⅰコリ 15:47)
受肉ー罪なき生涯ー受難ー死ー葬りー陰府	復活ー顕現ー昇天ー着座ーいのちを与える御霊

※これらがキリストの贖いの一連の出来事です。

●神は「最後のアダム」の死によって旧創造を終わらせ、「第二の人」の復活によって「いのちを与える御霊」という新創造をなされました。パウロはなぜ「第二の人」という表現を使うのでしょうか。答えは、第二のものが、第一のものよりも優れているからです(Ⅰコリント 15:42～49、ヘブル 8:7、9:3, 7, 28、10:9 を参照)。

(3) イェシュアの受肉

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 1 章 14 節

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。

父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

※①「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」という部分を、回復訳は「言(ことば)は肉体と成って、わたしたちの間に幕屋を張られた。わたしたちは彼の栄光を見た。」と訳しています。

※②「私たちはこの方の栄光を見た」とあります。それは、イェシュアが復活・昇天・着座されたことで栄光を受けたことを意味します。

※③「この方は恵みとまことに満ちておられた」とあります。新改訳では名詞の「ヘセド」(חֶסֶד)を「恵み」と訳しています(新共同訳は「いつくしみ」)。「ヘセド」とは「契約における確固とした愛」を意味します。一方、「まこと」を意味する「エメット」(אֱמֶת)は「それを実現する神の力」です。「ヘセド」と「エメット」、つまり「恵み」と「まこと」は二つで一つなのです。どんなにすばらしい愛が語られても、それを実現する力がなければ無意味であるのと同じです。イェシュアによってなされた贖いは「恵み」そのものですが、それだけでは絵に書いた餅同然です。その贖いを私たちのうちに実現させる力こそ「まこと」であり、アーメンなる方なのです。その意味でイェシュアは「恵みとまことに満ちておられる方」なのです。

●イェシュアは百パーセント神であり、百パーセント人です。このような存在は他にいません。神は私たちを贖うために、御子日イェシュアを「最後のアダム」としてこの世に使われてました。当時、イェシュアが神であることを知っていた人はどれほどいるでしょうか。イェシュアの両親のヨセフとマリア、バプテスマのヨハネ、それに悪霊たちとサタンです。

(4) 罪なき全き生涯

●イェシュアが 12 歳のとき、彼の神性の一面を見せた出来事がありました。それはイェシュアが迷子になった事件で、ヨセフとマリアが彼を見つけたときに、言ったイェシュアのことばは何だったでしょうか。

【新改訳 2017】ルカの福音書 2 章 49～50 節

49 すると、イエスは両親に言われた。「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」

50 しかし両親には、イエスの語られたことばが理解できなかった。

●イェシュアの神性が現れるとき、両親でさえもイェシュアが言っていることが分からなかったように、多くの者がつまずきました。「五千人の給食」の奇蹟の後に語ったイェシュアのことばに、弟子たちの多くの者か「これはひどいことばだ。そんなことを誰が聞いておられようか」(ヨハネ 6:60)と言っています。「これはひどいことばだ」という意味は、イェシュアが自分の血を飲み、からだを食べるならいのちを得ると言ったからです。「ひどい」という「」()は「気持ちが悪い」という意味です。これは彼らが霊で聞いているのはなく、肉で聞い

ているからです。特に、イエシュアの神性は宗教指導者たちとって決定的でした。イエシュアは小自分が神であり、王であるという理由で、神を冒涜しているという罪で殺されたのです。

(5) 受難・死・埋葬。陰府

●イエシュアは苦しみを受けられ、十字架にかけられ、死なれ、埋葬され、陰府へくだられました。しかしこれらのことは、私たちを贖うためです。
●そこで質問です。
【新改訳 2017】ヨハネの福音書 19 章 30 節
イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。

●キリストが十字架上で叫ばれた「完了した」(τελέω の完了形「テテレスタイ」Τετέλεσται)ということばは、何を意味しているのでしょうか。何が完了したのでしょうか。「完了した」(「テテレスタイ」) その内容は、「最初のアダム」によって引き起こされたすべてのことが終結したことを意味します。具体的には、
(1) 負債のすべてが血の代価によって免除された(帳消しにされた)。
(2) すべての罪が赦された。
(3) 最初のアダムが完全に終結された。

●このために、イエシュアは死の苦しみを味わったのです。ここでいう「死の**苦しみ**(=陣痛「オーディン」ὠδίν)」とは「復活によって新しいいのちを生み出す前の産みの苦しみ」のたとえです。「受肉から陰府にくだる」までがキリストの贖いの消極面です。しかし、そこにも主のなされたことに対する主の「満足」かあります。イザヤ書 53 章には次のように預言されています。

【新改訳 2017】イザヤ書 53 章 10～12 節
10 しかし、彼を砕いて病を負わせることは【主】のみこころであった。
彼が自分のいのちを代償のささげ物とするなら、末長く子孫を見ることができ、
【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。
11「彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。
わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。
12 それゆえ、わたしは多くの人を彼に分け与え、彼は強者たちを戦勝品として分かち
取る。彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからで
ある。彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」

●今から二千年前、私たちは「最後のアダム」であるキリストとともに「包括的に」すでに死んで葬られたのです。「完了した」というイエシュアのことばには、十字架による「苦しみ」にもかかわらず、「満足する」というニュアンスが含まれています。なぜなら、「最初のアダム」が完全に終結されたからです。

(6) 復活・顕現・昇天・着座・いのちを与える御霊となられた

●キリストの贖いは、消極面の後に積極面が来ます。すなわち、イェシュアが「復活からいのちを与える御霊となられたまで」です。これは出エジプト記の構造が示しているように、イスラエルの民の救いの目的が幕屋を通して神がイスラエルの中に住まわれること同様です。キリストの贖いの一連の出来事(消極面と積極面)こそ、初代教会が伝えた「福音」なのです。それを簡潔に表したもの(スローガン)が、120 歳の奥義である「死と復活」と言えますが、その内実を私たちは時が良くても悪くても、常に宣べ伝え、教え続ける必要があるのではないでしょうか。そうするなら、イェシュアの言われる以下のことばが理解できるのです。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 6 章 63 節
いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。

●イェシュアの十字架の死は、私たちのすべての負債を帳消しにして、罪を赦すためです。そしてより大切なことは「最初のアダム」を完全に終結させるためでした。しかしそれは贖いの消極的な面です。贖いの積極面は、イェシュアが「第二の人」として復活し、昇天し、御座に着座されたことで「いのちを与える御霊」となられたことです。そのことによって、私たち(被造物全体も含めて)が新しく造られる道が開かれたのです。これは贖いの究極的目的です。そのために、神であるイェシュアが人間とならなければならなかったのです。聖霊が存在するだけではそれは絵に書いた餅のようで、新しい創造は成し得ることができません。ここに、御子による贖いの偉大さがあります。

●イェシュアは「わたしと父とは一つです」(ヨハネ 10:30)と言われました。それならば、「わたしと御霊とは一つです」とあってもおかしくありません。しかしなぜ(公生涯において)イェシュアはそう言われなかったのでしょうか。以下にヒントがあります。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 7 章 38～39 節
38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、
生ける水の川が流れ出るようになります。」
39 イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われた
のである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下って
いなかったのである。

●「栄光を受ける」のは、贖いの一連の出来事が完全になされた後です。ですからこの時点ではまだ栄光を受けておらず、御霊も下っていなかったのです。しかし後に御座に着座されたイェシュアが「いのちを与える御霊となられた」ことで、はじめて「主は御霊です」(=イェシュアと御霊とは一つ)とパウロは言うことができたのです(Ⅱコリント 3:17)。御父と御子と御霊が三一の神であることを単に教理として理解するのではなく、聖書が証言する三一の神の生きたあかしによって理解することが大切です。
●Ⅱコリント書の 3 章は、御霊に関する偉大な章の一つです。

【新改訳 2017】Ⅱコリント人への手紙 3 章 6, 17～18 節

6 神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。
文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者となる資格です。文字は殺し、御霊は生かすからです。
17 主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。
18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、
栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。
これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

●最後のアダムであるイェシュアが**いのちを与える御霊**となられたことで、その御霊は主を信じる者たちが「王である祭司」となるための「**注ぎの油**」となります。この「注ぎの油」(油塗り)について、旧約の祭司に関しては多く言及されていますが、新約聖書ではわずかに以下の 2 回のみです。

【新改訳 2017】Ⅰヨハネの手紙 2 章 20, 27 節

20 あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。

27 しかし、あなたがたのうちには、御子から受けた注ぎの油がとどまっているので、だれかに教えてもらう必要はありません。その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。それは真理であって偽りではありませんから、あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。

●「あなたがたには聖なる方からの注ぎの油がある」とあります。これぞキリストの贖いによって恵み(「ヘセド」חֶסֶד)として与えられているものです。それを信仰によって働かすなら、力を経験できるのです。これが「まこと(「エメット」אֱמֶת)です。御子から受けた「注ぎの油」は「恵み」です。そして「注ぎの油」によって実際に真理を教えられることが「まこと」であって、偽りの教えに惑わされることがないのです。

(7) キリストに贖われた者はみな王なる祭司

●新約の神の子どもはすべて祭司です。しかも「王なる祭司」なのです。その意識が今日の教会に欠落しています。祭司と言っても旧約の祭司のように祭儀に関わる務めではありません。祭司の本来の務めは、神がアダムに与えられた務めであり、地を「耕す」ことです。「耕す」というヘブル語は祭司用語です。神のそばにいて、神の声を聞き、神を知ること、神が与えるものを享受、それを分かつ務めです。旧約のイスラエルの人々も、また新約の神の子どもはみな祭司なのです。

①【新改訳 2017】出エジプト記 19 章 6 節
あなたがたは、わたしにとって**祭司の王国**、聖なる国民となる。
②【新改訳 2017】Ⅰペテロの手紙 2 章 5 節
あなたがた自身も・・、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・
キリストを通して献げる、**聖なる祭司**となります。

③　【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 1 章 6 節

また、ご自分の父である神のために、私たちを**王国とし、祭司としてくださった**方に、

栄光と力が世々限りなくあるように。アーメン。

④　【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 20 章 6 節

この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。

この人々に対して、第二の死は何の力も持っていない。

彼らは神とキリストの**祭司となり**、キリストとともに千年の間、**王として治める**。

⑤　【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 22 章 3～4 節

3 もはや、のろわれるものは何もない。神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、

4 御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。

●聖書は創世記から黙示録まで一貫して、人が「**王なる祭司の務め**」を与えられた者であることを教えているのです。そして、この回復はイエシュアの復活の夕べに弟子たちに息を吹きかけて「聖霊を受けよ」(内なる聖霊に満たされた**プレーロー**)と言われたとき、および五旬節に天から聖霊が下ったときに(外からの聖霊に満たされた**ピンプレーミ**)で、包括的に実現・成就したのです。

3.「包括的な私たち」と「個別的な私たち」の区別を知る

●キリストの贖いを正しく理解する上で、「包括的な私たち」と「「個別的な私たち」を知っておくことは有益です。特に、「包括的な私たち」を理解することによって、パウロが語っている

①　「キリストとともに十字架につけられた」

②　「キリストとともに死んだ」

③　「キリストとともに葬られた」

④　「キリストとともによみがえらされた」

⑤　「キリストとともに天上に座らせてくださった」

といった難解なことばの意味がよく理解できるようになるからです。特にキリストが「いのちを与える霊(御霊)となった」(Ｉコリント 15:45)ことは、私たちがやがてキリストの再臨(携挙)のときに「御霊のからだ」に変えられることの確実な保証でもあるのです。

●それゆえ、単なる「死と復活」ではなく、「受肉」から「いのちを与える御霊となられたこと」までの一連の出来事であるキリストの贖い、すなわち「福音」を理解する上で重要なのです。教会における福音理解のメンテナンスが今日不可欠なのです。